

## 町を支えた石工

川越の歴史的建造物を代表する蔵造り商家。実は建物の土台部分には多くの石材が使われ、その加工や施工には石工が携わっていたことをご存じでしょうか。蔵造りなどの建物に限らず、寺社の狛犬や燈籠、供養塔、墓石などさまざまな用途に石材が使われ、主に地元の石工が必要に应运えました。江戸前期の元禄期には、すでに長嶋三郎右衛門という石工が旧・南町に住んでいたことが氷川神社(宮下町)に残る鳥居の銘から分かります。この頃は石工の名を刻むことは少なく、鳥居など一部の仕事に限られていました。



石工名などが刻まれた三芳野神社の水盤

江戸後期の天保期以降には富澤久助(旧・高澤町)や吉野金五郎(旧・妙養寺門前町)など複数の石工の名が見られます。中でも明治期の三代目富澤久助は、多くの弟子を持ち、皇居造営にも携わるなど活躍の場を広げました。また、明治以降は、石工の名を刻むことが増え、熊野神社(岸町二丁目)の燈籠を製作した山崎太右衛門(旧・橋町)のほか、複数の石工の名も確認できます。寺社等の石造物に刻まれた銘は、かつて町の生活を支えた石工の記録とも言えます。

## 切り花部会



川越は、全国でも有数の金魚草の産地です。金魚草をはじめとした切り花を生産している11の農業者で組織しているのが切り花部会。年に数回、視察などを通して生産技術や品質の向上に努めています。

母の日に送るお薦めの切り花を聞いたところ「トルコギキョウはどうですか」と、同部会の山田宜正さん(鴨田・右上写真左)。7月頃に種をまき、出荷できるのは、翌年の2月~6月。「見栄えを良くするために

花芽を摘んだり、病気に注意したりと、ほかの花より手間はかかります。最近は大輪のものが人気です」と山田さん。最盛期には1日で5,000~7,000本出荷されます。直売所などで購入することもありますが、需要が高いため、市場流通がほとんどです。母の日のプレゼントの候補として探してみたいはいかがですか。



今が旬! 5月の川越野菜 市内の直売所などで購入できます  
フキ、チンゲンサイ、キヌサヤ、キャベツ、ネギ、ブロッコリー、ハウレンソウ、コマツナ、トマト、キュウリ、カブ、ダイコン、レタス、新タマネギ

金魚草

**若** 葉は、その意味が転じて、「新しい」という言葉で使われることもあります。この時期は、4月に学校や会社などで新生活をスタートさせた人が、少しずつ慣れてくる頃です。新しい命や、若葉の成長が楽しみな季節でもあります。



前の景色と違ってみえるほどの成長に生命力の力強さを感じました。

**夏** も近づく八十八夜: 「茶摘み」の歌にもあるように若葉などの新緑がまぶしい季節です。緑や花のある景色を撮影するために市内を回っていると、草木の緑や色とりどりの花を目にし、ほんの数週間前の景色と違ってみえるほどの成長に生命力の力強さを感じました。

編集後記  
どんぐり